

地質から見る歴史・文化

新宮観光ガイドの会が研修会 新宮市



後誠介さん

新宮観光ガイドの会(西田晴胤会長)は2日、新宮市春日の人権教育センターで研修会を開いた。日本地質学会会員の後誠介さんから『熊野のジオサイト浮島の沼沢と神倉の霊場』をテーマに、地質、大地の生い立ちの視点からみた浮島や神倉など熊野の霊場の魅力を学んだ。浮島はもともと入り江だった場所の水が引いて沼地となり、その後人間活動の影響でできたとする説が最も有力とされる。熊野川が市内を流れていた名残でできたとする説もあるが、市内の岩盤を調査すると、流れていたとされる下流側に向かっ

て岩盤は高くなっており川があったとは考えられないという。一方、浮島の地下からは海の貝が出土しており、入り江だったことは証明されている。

人間活動の影響とは、浮島周辺は近世初頭まで広大な沼地だったが、水田化が進み水域が狭くなったことで水位が上昇。性質のやや異なる2つの泥炭層の間で剥離が起こり上の層が浮遊体となった可能性が考えられる。浮島の底と沼の表面の泥を年代測定したところ1710年プラスマイナス40年とのデータが出たこと、熊野詣が盛んだったにもかかわらず中世以前の文献に浮島の記述が出てこないことから、可能性は高いという。



話を聞く新宮観光ガイドの会の皆さん=2日、新宮市人権教育センター

古座川の河内島など、無かったら祭りそのものが存在しなかった岩体もあり、「地質は歴史や文化と一見関係ないように見

えるが、最も根本的な部分で密接に関係している切っても切れないもの」と話した。